



# フランスカンと環境正義



# フランスカンと環境正義



J P I C 担当室

ローマ 2011年



小さき兄弟会

# フランシスカンと環境正義

環境の危機と社会正義に  
直面して

J P I C担当室  
ローマ、2011年



## 目 次

|                                             |    |
|---------------------------------------------|----|
| はじめに .....                                  | 5  |
| I. 危機に取り組むためのフランスカンの動機 .....                | 7  |
| II. グローバル化した世界のための新しい倫理観 .....              | 13 |
| III. 環境正義 .....                             | 17 |
| IV. 環境正義の体験と考察 .....                        | 21 |
| 1. インドネシア：鉱業と繁栄の夢 .....                     | 21 |
| 2. アフリカにおける豊かさの謎と環境悪化 .....                 | 25 |
| 3. アマゾンと環境正義に関する考察 .....                    | 32 |
| 4. ニューオーリンズ：私たちはこの地上に永久の都を持っ<br>ていません ..... | 40 |
| ロス・イレニョス .....                              | 43 |
| 第九区 .....                                   | 45 |
| 結論 .....                                    | 49 |



## はじめに

2003年および2009年の小さき兄弟会総会は、環境問題を認識し、それに取り組むようにと兄弟たちに勧めました。この小冊子は、世界中の兄弟が私たちの直面する環境危機について真剣に考えるのを助けること、そして、私たちみなを、特に貧しい人々を苦しめる諸問題に積極的に取り組むように勧めることを目的としております。

第一部では、この問題に取り組むにあたってフランシスコの霊性に由来する動機を取り上げます。第二部では、グローバル化した世界の新たな現実に取り組むのに必要な新しい倫理観について述べます。第三部では、人権に対して私たちが従来から持っていた関心とこの被造世界の健康に対する関心とを結び付けながら、環境正義の意味について説明します。第四部では、環境正義に関する諸問題を四つの具体的な状況に分けて紹介します。最後の第五部（結論）では、「時のしるしを読み」、現在の危機に取り組むための具体的なアクションを起こすことを勧めています。





## I. 危機に取り組むためのフランシスカンの動機

アシジのフランシスコの靈性は、現代の環境危機に取り組む努力に全面的に関わろうとする強い動機をフランシスカンに与えてくれます。それは、フランシスコの足跡に従いたいとの願いから生まれる、母なる大地とすべての被造物に対する特別な気遣いと責任を特徴としています。聖フランシスコが、1979年に教皇ヨハネ・パウロ2世<sup>1</sup>からエコロジーの守護聖人と呼ばれたのには理由があります。彼は現代の私たちと同じ問題を抱えていたわけではありませんし、彼の時代の環境は、現代と同じ世界的な脅威に直面していたわけでもありませんが、世界に対する彼の態度と自然との関係は私たちを正しい方向に導いてくれます。この地球とそこに住むすべての生き物を脅かす危機に取り組むことは人間の責務であることを、思い起こさせてくれるのです。

彼の時代に一般的に見られた靈性とは異なり、フランシスコは靈的な世界を物質的な世界から切り離して考えることをせず、ましてや物質界を神なき世界として軽蔑するなどということはありませんでした。彼はこの地球と自然界のすべてのものを神の被造物として、御托身の間として見ていました。フランシスコはすべての被造物に―生命あるものもないものも―大いなる尊敬をもって接し、それらに従おうと努めました。

---

<sup>1</sup> 世界平和の日のヨハネ・パウロ2世のメッセージ、「創造主なる神との平和、すべての被造物との平和」1990年1月1日（#96）参照。

た。この態度は、人間を地球の支配者と考える霊性とは異なるものです。フランシスコは人間を自然界の他の存在の上にあるものとか外にあるものとは考えませんでした。他の存在は、彼にとり共に同じ神によって造られた兄弟姉妹であったのです。彼のその霊性は、晩年に作られた「太陽の歌」<sup>2</sup>にユニークな詩の形で表れています。「太陽の歌」はただ神を創造主として称えているのではありません。フランシスコはこの賜物のゆえに神に感謝するために、自然界の外に身を置いたのではないのです。むしろ、被造物の共同体と共に、その共同体の一部として、すべてのいのちと造られたものの源である神を賛美したのです。この被造物の神への賛歌を構成するのは、あるがままのその姿です。被造物は本来あるべき姿となっています。

それこそが、フランシスコの霊性と、人類の未来にのみ関わる環境への関心とを区別するものです。フランシスコの霊性においては、神がお造りになったすべてのものへの深い尊敬と、それらとの内的な連帯から、被造物への配慮があふれ出ています。フランシスコは宇宙全体との一致を感じていました。聖パウロは、キリスト者共同体はキリストの体を構成し、各構成員の喜びと苦しみは、体全体の幸福と苦しみになると言っています（1 コリント 12:12-31、コロサイ 1:18、2:18-20、エフェソ 1:22-23、3:19、4:13 参照）。フランシスコにとり、それと同じ真理が宇宙全体に対しても当て

---

<sup>2</sup> 「太陽の歌」の原文（ウンブリア方言）は、  
<http://www.silab.it/cgi-bin/poeweb.exe?t=2262078949&n=34&p=106&c=V> 参照。日本語訳：小品集 pp49-54

はまります。今日の私たちは、彼の洞察が科学報告書に確認されているのを見ることができます。すなわち、世界の一部の破壊が世界中の苦しみにつながっているということです。

被造物に対するフランシスコの尊敬と連帯は、内面的で実践的な従順の態度によく現れていました。修道者は従順の誓願によって、他者を介して自分自身を完全に神に委ねます。フランシスコはこの考え方を、すべての人への、そして、野生が飼いならされたかを問わずすべての動物への服従をも含むものへと敷衍しました。彼はこの服従に神学的な理由づけをしています。つまり、被造物に従うことによって、人は自分の源である創造主、自分が存在し、行動し、自分の欲求を表現することをおゆるしになる創造主に従うのであると。

それゆえに、フランシスコは人生をこれらの被造物の視点から見ていたのです。彼は被造物の絶対的ニーズを理解していました。彼の態度は、深い同情の表れであり、同情に駆られた彼は、それぞれの生き物のニーズに従って環境を保護する適切な方法を探し求めたのでした。ここに、それぞれの生き物への配慮だけでなく、生き物が生息する場所への配慮をも見ることができます。これが、生息環境に配慮し、生態系の完全性を保護することへの初の呼びかけであり、こうして、存続を確実にする相互関係が保証されます。競争したり、乱用や支配を試みたりすることには意味がありません。人類と他の生き物は、互いに配慮し合い、助け合うように造られています。こうして、そのために神が彼らを造られた目

的善が実現します。

脅かされているという認識のないところに、恐怖はありません。生き物たちがフランシスコに服従したのは、フランシスコの善良さと気遣い、そして、自分たちの存続と繁栄を願ってくれていることをなんとなく感じ取ったからでした。彼は、生き物たちの前に姿を表す時、武器を持たず、彼らから何かを得ようとはせず、むしろ彼らの幸せのために喜んで身を捧げようとしていました。このことは、それぞれ別な形で実際に起こり、グッピオの狼のエピソード<sup>3</sup>とマルケ・アンコーナの小羊のエピソード<sup>4</sup>として綴られています。フランシスコは、和睦を促進し、双方が互いに服従し合う関係を身を持って示して、みんながありのままにいられ、神を賛美するようにしたのであります。友情と優しさは、いつも勝利を収めます。

フランシスコの態度は、私たちが直面しているエコロジー問題に取り組むための堅固な基盤を与えてくれます。会憲にはこう書かれています：「聖フランシスコの足跡をたどる兄弟たちは、今日至る所で脅かされている自然に対して尊敬の念を示す。このように創造主である神の栄光のために、自然を兄弟とする関わりを十全に回復し、すべての人間の益とならせる」（会憲 71 条）。2009年の総集会は、こう要請しています：「次の6カ年間（2009年－2015年）に、J P I C担当室の力を借りて、本会のすべての構成単位は、私たち

---

<sup>3</sup> Franciscan sources: The Deeds of Blessed Francis and His Companions, XXIII 参照。小さき花 21。

<sup>4</sup> 1 チェラノ 77-79 参照。

の生き方が被造物に及ぼす影響、特に気候変動における影響を検証すること、そして、社会問題とエコロジーの問題の關係に注意を払うために、環境正義を推進すること。」

この総集会の決定を遂行するためには、まず「環境正義」という言葉の意味を理解しなくてはなりません。それが、この小冊子の目標です。ローマの J P I C 担当室は、総集会の決定により提起された 2 番目に重要な問題、すなわち、人間以外の被造物に対して私たちの生活が及ぼすエコロジカルな影響、を扱うもう一つの文書を準備しました。





## Ⅱ. グローバル化した世界のための新しい倫理観

**環**境正義の問題について話し合う前に、私たちを取り巻く世界について考えることが大切です。現代の諸問題に取り組む私たちにフランシスコはインスピレーションを与えてくれますが、彼がこの運動を始めてからこの800年の間に世界は大きく変わりました。フランシスコの時代には、ほとんどの人々は自分の閉ざされた世界に暮らしていました。旅行やコミュニケーションは容易ではなく、貿易その他の経済諸構造も、やっと発達し始めたばかりで、人口も少なく、大半の人々は農村地域に住み、農業や畜産に従事し、国民国家はまだ形成されてはいませんでした。フランシスコも当時の人々も、今日私たちが住んでいる複雑な世界のことや、そのような複雑さを伴う諸問題のことなど想像することすらできないでしょう。だからこそ、フランシスコの価値観を効果的に活かすためには、私たちが暮らしている世界を理解する必要があります。

現代世界は地球村と化していると言われています。その過程は、一連のグローバル化の傾向によって加速されています。たとえば、

- 即時的コミュニケーションにより、世界中の人々が最新の出来事を知り、互いに連絡を取ることが可能になっている。
- 世界銀行や国際通貨基金、世界貿易機構などの地球規模

の経済関連機関の存在が、世界経済の統合を加速させている。

- 温室効果ガスと気候変動という現象に対して人間がますます責任を引き受けつつあるということは、私たちが如何に一つの大気圏を共有し、世界の一部の人々の行動が如何に地球上の他の人々に影響を与えるかを示している。
- 旅行や広域の移動は、多くの地理的・文化的壁を打ち壊し、民族や文化の混合を促した。
- 国連やその他国際司法裁判所のような国際機関の政策や行動が、地球規模の諸問題に取り組むことのできる組織に初期の関心を示して来ている。

➤ うしたグローバル化の傾向が現に存在し、成長しつつあることを考えると、さまざまな人や組織は、この新たな状況に対処するために、これまでとは違った種類の倫理観を必要とします。2001年の国連の報告書はこう記しています：「他の誰かの貧困はやがて自分自身の問題になる。たとえば、自分が作った製品を売る市場がないこと、不法移民、公害、伝染病、治安の悪さ、狂信主義、テロリズムなど。」<sup>5</sup> この引用文は、私たち共通の問題に対処することのできる原則や組織を見出すことの緊急性を強調しています。

- ピーター・シンガーは、その著書「一つの世界：グローバル化の倫理」の中で、来るべき一つの世界共同体の時代のために倫理的基盤を構築すること、そして、グローバルな政策決定のできる機関を、人々に対するその影響

---

<sup>5</sup> <http://www.un.org/esa/fid/a55-1000.pdf> 参照。



力に責任を持たせつつ、強化することを提唱しています。<sup>6</sup>

- 多くの評論家は、環境保護と経済の発展と社会的公正という3つの柱の上に建てられた持続可能性の倫理について語っています。<sup>7</sup> それと同時に、一部の批評家は、持続可能性という言葉を巧妙にPR作戦として用いるだけで、持続可能性を自分たちの行動に作用する原則としていない企業の利益に警戒するように、と促しています。
- 「被造物への配慮：地球についてのフランシスカンの霊性」と題する本の中で、著者たちは、被造物との連帯的な関係の特徴とする「家族的あるいは親族的な倫理」を提唱しています。このアプローチは、神と被造物に対するフランシスコの態度から生まれたものであり、この世界に生きるための新しいパラダイム（模範）を教会と社会に示してくれます。<sup>8</sup>
- イタリアのパドヴァでランツァ財団 (Fondazione Lanza) が開催した倫理と気候変動に関する第六回国際会議の総括文書は、気候変動について、「予防措置」の必要性を訴えています。彼らは地球の気候変動に適切に対処するためには、地球規模の共同体が科学的、技術的、政治的、

---

<sup>6</sup> Singer, Peter, *One World: The Ethics of Globalization*, second edition. Yale University Press, New Haven and London, 2004.

<sup>7</sup> たとえば、以下参照：Warner, Keith Douglass, OFM. *The Spirituality of our Sustainability Work: Cultivating an Ethic of Care*, Sustainability Booklet 2, Santa Clara university. See <http://www.scu.edu/kwarner>

<sup>8</sup> Delio, Ilia, O.S.F.; Warner, Keith Douglass, O.F.M.; Wood, Pamela. *Care for Creation: A Franciscan Spirituality of the Earth*. St. Anthony Messenger Press, Cincinnati, 2008, pp. 77-79.

経済的レベルで、全面的に力を合わせ、現代の生態系の危機に取り組む必要があることに気付いています。<sup>9</sup>

上述の著者たちは皆、世界の諸民族、諸国家が相互に依存する存在であることを認識しています。J P I Cの活動に携わる兄弟たちは、このような相互関係を強調する試みとして、向こう6年かけて、環境正義を私たちの活動の包括的コンセプト（構想）とすることに決めました。私たちがこのような選択をしたのは、二つの関心事をはっきりと示すためです。一つは、すべての人々の人権を擁護することによって、彼らの尊厳を保証したいという、私たちが昔から抱いている関心事です。二つ目は、私たちが現在直面している前例のない生態系危機への増大する懸念です。私たちが体験している気候変動は、人間の活動の結果であり、もはや後ろに引けない局面に来ているということ、皆が強く感じています。これから述べる考察は、この決断を説明し、発展させると同時に、私たちが用いているコンセプト（構想）を明確にする役に立つと思います。



---

<sup>9</sup> *Ethics and Climate Change. Scenarios for Justice and Sustainability.* Final document: Sixth International Conference on Ethics and Environmental Policies. Padova, Italy, October 23-25, 2008.

### Ⅲ. 環境正義

**環**境正義という言葉は、エコロジーと社会正義というコンセプトとつながっています。それは、生態系の問題と、正義・平和・個人や民族の人権擁護の問題との間に深い関わりがあることを表しています。それは、環境に関する法律、規則、及び政策の発展と強化について、すべての民族、すべての文化、すべての所得階層、すべての教育レベルの人たちを公平に扱うことを要求しています。公平に扱うとは、いかなる人々も、政治的・経済的な力がないという理由から、汚染やその他の環境危機の弊害を不当に背負わされてはならないということを意味しています。実際、環境への世界規模の攻撃は、貧困層への攻撃となっており、環境による人種差別を生んでいます。

地球の破壊と地球資源の汚染は、現代の経済モデルとの関連で発生したもので、多くの暴力と飢えと不平等を生みだしています。このシステムでは、土地や畑を失うのも、天然資源をめぐって大国が仕掛けた戦争に苦しむのも、自分の土地が金持ちのゴミ捨て場になるのも、最も貧しい人々なのです。貧しい人々は、戦争や暴力といった昔からの理由によるだけでなく、さらには、干ばつや洪水、砂漠化、種の消滅などの日々悪化する環境的な原因によって、世界各地で自分の家や土地からの立ち退きを余儀なくされています（そうした災害によって住居を追われた人々は、最近では、「環境難民」とか「気候難民」と呼ばれるようになっていきます）。環境危機の影

響に最も苦しむのは、貧しい人々なのです。

人間の生活の質は、環境の質と密接な関係があります。健全で持続可能な生態系がなければ、すべての生き物の生活の質は悪化し続けます。ですから、人間の尊厳を促進することは、すなわち、健全な生態系を促進することであると言っても過言ではありません。私たちは、生物の多様性を失わせ、気候変動を引き起こす主原因である現代の経済モデルと消費主義のメンタリティを考え直し、変えてゆく必要があります。



C I D S E (発展と連帯のための国際協力: 16のカトリック開発支援国際ネットワーク) は、気候変動が単なる環境問題ではなく、まず地球規模の正義と公平の問題であることを強調しています。C I D S Eの報告書によれば、人間が引き起こした気候変動の影響は、もっぱら途上国に住む貧しく、弱い立場にある人々に大きな影響を与えるそうです。彼らは、自分たちがほとんど関わっていないグローバルな問題の影響を最も多く受けるのです。<sup>10</sup> これらの影響としては、大きな自然災害、食糧不足、清潔で安全な水の不足、そして、健康のリスクの増大が挙げられます。<sup>11</sup> C I D S Eは、天然資源をむやみに消費したことに対する先進諸国の特別な責任を強調しつつ、気候変動に迅速かつ効果

---

<sup>10</sup> <http://www.cidse.org/> CIDSE position paper on development and climate change, p.4 参照。

<sup>11</sup> CIDSE position paper pp. 9-11.

的に取り組む必要を訴えています。先進諸国はその解決策のための費用を払い、途上国がさらなる気候変動を誘発せずに発展の道を歩むことができるよう助ける義務があります。<sup>12</sup>



---

<sup>12</sup> CIDSE position paper p. 13.

教会においては、エコロジーの問題に対する意識はいつも高まっていました。第二バチカン公会議の後、世界に対する教会の関わりについて言えば、その中心は社会正義に向けられていました。そして、それは当然のことながら教皇ヨハネ・パウロ 2 世の時まで続きました。日々高まっていた環境問題に対する教皇の関心は、1990 年の世界平和の日のメッセージ「創造主である神との平和、すべての被造物との平和」に集約されています。このメッセージは、公教会をすべての生き物にとっての環境の危機に目覚めさせる警鐘となりました。彼は、2001 年にこの考えを敷衍させ、すべての人々に、エコロジーの問題に対する感受性の高まりである「エコロジカルな回心」を呼びかけ、自分のライフスタイルを批判的に見つめるように促し、環境保護への責任感を養う教育の重要性を説き、環境の危機は倫理的問題であることを強調したのです。<sup>13</sup> ベネディクト 16 世は、この関心に同意を示し、被造世界の貴さに対して現代の神学者の関心が薄いことを嘆いています。彼は、人類は地球の声に耳を傾けなければ、己の存在自体が危うくなると述べています。<sup>14</sup>

---

<sup>13</sup> 2001 年 1 月 17 日水曜日のヨハネ・パウロ 2 世の一般謁見参照。  
[http://www.vatican.va/holy\\_father/john\\_paul\\_ii/audiences/2001/documents/hf\\_ip-ii\\_aud\\_20010117\\_en.html](http://www.vatican.va/holy_father/john_paul_ii/audiences/2001/documents/hf_ip-ii_aud_20010117_en.html) .

<sup>14</sup> Benedict XVI, Meeting with Clergy of the Dioceses of Belluno-Feltre and Trevisino, Italy; July 24, 2007 参照。  
[http://www.vatican.va/holy\\_father/benedict\\_xvi/speeches/2007/july/documents/hf\\_ben-xvi\\_spe\\_20070724\\_clero-cadore\\_en.html](http://www.vatican.va/holy_father/benedict_xvi/speeches/2007/july/documents/hf_ben-xvi_spe_20070724_clero-cadore_en.html) .

## IV. 環境正義の体験と考察

➤ れまでの考察は、環境正義という言葉を定義するため  
— のものでした。ここで、兄弟たちや他の人々がこのコンセプトを自分の生活や使徒職で実践する実例を挙げることは、役に立つと思います。以下に挙げる四つの体験は、正義と環境の問題が交差するさまざまな状況を示すものです。これらの体験がきっかけとなって、私たち皆が自分の日々の生活と使徒職の具体的な現実を振り返り、さらには、私たちの兄弟姉妹や環境に影響を及ぼす諸問題に取り組む必要を考えるようになればと願っております。

### 1. インドネシア：鉱業と繁栄の夢

ピーター・エイマン、OFM

インドネシア人の大半が我が国の鉱業の結果、より一層繁栄したという証拠はどこにもありません。西フローレスのシリジーでは、1980年代からマンガン鉱山が操業しています。金儲けのために、山々は平らにされ、森林は破壊され、マンガンが採掘されていますが、地元の人々の生活は変わらないどころか、悪化しています。

鉱山会社がやって来た時、人々は土地を会社に譲り渡す代わりに、社会的・経済的繁栄を約束されました。それ以来、人々は土地を失い、最低賃金2万4千ルピア（2.4米ドル）の日

当で鉱山で必死に働いています。

インドネシアは鉱山会社がひしめく国です。西パプアでは、フリーポート・エンタープライズ社が広大な金の採掘場を開発しましたが、その地域に住むパプアの人々は依然として貧しく、社会の底辺で疲弊しています。インドネシアの小さな島々の生態系がダメージを受けたために、人々は他の島や都会への移住を余儀なくされています。フローレスではまたもや、ある企業が観光地の近くで採掘の準備を始めましたが、それによって、近くのコモド国立公園や浜辺、ホテル、水、空気、などが影響を受けるでしょう。他にも悲惨な例はいくつかありますが、いずれも同じ真実を示しています。つまり、鉱業は地元の人々に快適な生活と繁栄をもたらすのではなく、貧困をもたらすということです。

鉱業は掘削によって直接的に土地にダメージを与えるので、環境保護の点で、問題を抱えています。鉱業は土壌の組織を変えてしまい、その結果、その土地は肥沃さを失います。鉱業は、人間も含めた生き物を支える力を土地から奪ってしまうのです。





鉱業がもたらすもう一つのダメージは、廃棄物で、それは土地や水、空気を汚染します。この汚染は、直接人間の健康を脅かし、悲惨な病気の原因となります。鉱業は人間と他の被造物の生命を破壊するのです。

地元の文化と英知の視点から考えれば、土地は経済的な物質であるだけでなく、すべての生き物の生命の源でもあります。だからこそ、土地を個人の財産と主張する人はおらず、共有財産とされているのです。インドネシアの多くの地域社会では、人々の生活のためにものを育て、実りをもたらすその寛大さのゆえに、土地を「母」と呼んでいます。

土地はそうした人々の生活に欠くことのできない部分であり、高い地位を獲得しています。土地は、文化的にも、儀式的にも尊重されており、水や森林とともに、土地を称える特別な儀式もあります。土地を人間の存在と切り離すことはできません。言い換えれば、土地を開拓することは、人々の生活全体にダメージを与えることを意味します。鉱業は本来破壊的であり、自然も人間も破壊します。

それでは、なぜ人々は鉱業の存在と活動を許しているのでしょうか。体験から、そして調査の結果から、二つの理由が分かりました。一つは、繁栄と共通善の約束です。二つ目は、鉱業とそれが地元の人々の生活や生態系にもたらす影響について地元の人々が無知であるということです。

鉱業が金儲けになると言うのは本当です。ですが、利益を得るのは誰でしょうか。お金はどこに行くのでしょうか。答えは簡単です。資本家と政府とその取り巻きがお金を得ているのです。地域社会は、「地域の社会的責任」(CSR=Community Social Responsibility)によって実践される「トリクルダウン効果」(じわじわと浸透する効果)から恩恵を受けていると思われます。このCSRによって、鉱山会社はダムや、静浄水、クリニック、学校、電気、道路などの公共サービスを人々に提供しています。しかし、サービスの質は遺憾な点が多く、それらが機能するのは、企業がそこにいる間だけです。CSRは、ほんの短時間化粧をほどこす口紅のようなものにすぎません。人々の生活の質を改善することはないのです。純朴な地元の人々は、短期間提供され、永遠に失う土地と森林の代償として支払われるこうした公共サービスの約束によって「毒されて」来たのです。

——▲ 一般の人々は、鉱業のことやそれが自分たちの生活や自然界に及ぼす影響について十分な知識を持っていません。鉱山会社はそれに付け込んで、地元の人々を、快適な生活と繁栄という約束で巧みに操っているのです。その約束が実現することはめったになく、それどころか、人々は常に自分の土地と環境を奪われています。

これまでのところ、鉱山会社がダメージを修復したり、採掘作業中に破壊された自然を回復したという例はありません。その工程は非常に費用がかかり、それに対して責任を引き受

けた鉱山会社は一つもありません。この業界は、人権、共通善、そして環境破壊と言う点で、インドネシアの人々に不利益をもたらしています。鉱業がこれ以外の形で「発展」に寄与したという例を私たちは知りません。ですから、私たちは



「鉱業は要らない!」と言うべきだという結論に達したのです。

## 2. アフリカにおける豊かさの謎と環境悪化

ジャンフランシスコ・シスト、OFM

マイケル・ペリー、OFM

**彼** 女の名前はママ・ニャンブラと言います。彼女とその子供たちは、ナイロビに数ある都市部のスラム地区の一つであるマサラ・ヴァレーに住んでいます。マサラは、50万人以上の人々が錆びた金属板や段ボールでできた掘っ建て小屋に住んでいることで有名です。ちゃんとした下水道や

衛生設備がないために、その臭いはナイロビまで流れて来ます。雨季になると、劣悪な建て方のトイレが溢れ出し、人間の排せつ物が歩道や車道だけでなく、マサラの人々が住む家や事務所にまで噴出します。この貧困と病気の窪地ではゴミの収集も行われていません。そのような環境では、コレラ、マラリヤなどの水系伝染病が猛威を振るっています。伝染病は、稼いだ僅かな賃金で、あるいは、サービスや物の物々交換でやっと生計を立てている人々を打ちのめします。これから、ナイロビ近郊やケニアの都市部のスラム地区およびアフリカ亜大陸に住む多くの人々の社会的・経済的現実をご案内します。

マサラが存在する主な理由の一つは、植民地時代まで遡って、ケニアの土地収用の歴史に由来します。植民地時代の歴史が、1963年のケニアの独立時から状況がなにも変わっていないことの理由を説明する一助となっています。植民地時代に作られた土地法は、政治家やケニアおよびケニア以外の経済プレーヤーによって悪用されました。多国籍企業もまた、土地の強制収用と一般市民の国内の他の地域への強制移住に大いに一役買ったのです。マサラ・ヴァレーのママ・ニャンブラの状況は、土地がないことに由来する悪循環に陥っている何百万ものケニアの人々のほんの一例に過ぎません。土地がないために、特にこの国の選挙の時期に暴力が生まれることがよくあります。ケニアの都市部のスラム地区は、しばしば大きな不満の中心となります。住民は不誠実な政治家にとっては御しやすい道具となり、政治家たちは自分の政敵の力を

そぎ、自分の政治生命を強めるために、民族的なアイデンティティーの問題を利用して、土地のない都市部の大衆の苦境を巧みに操っています。民族的なアイデンティティーと絶望的な貧困は、ケニアの最も大切な天然資源と豊かで肥沃な土地を巧みに操作して、没収することを可能にし、促進する二つの現実です。1980年代にまで遡る大統領選挙を丹念に調査した結果、民族問題の巧みな操作と、政治的動機に基づいた暴力の誘発が明らかになったのです。

ママ・ニャンブラは、私たちが会った時には40歳で、3人の子供を持つシングルマザーでした。彼女の夫は、彼女が妊娠して、HIVに感染した時に彼女を見捨てたのです。2008年12月のケニアの不運な大統領選挙と、それに続く暴動の後、ママ・ニャンブラは自分の住む町の中で「行き場を失った人(Internally Displaced Person)」(IDP)となりました。彼女はマサラの他の人々から、選挙結果を操作し、ケニアの将来を奪ったそしりを受ける特定の民族グループに属しているとみなされたのです。ニャンブラとその子供たちは、マサラ周辺にある同じように行き場を失った人々の簡易宿泊所に、他の7人の見知らぬ人々と暮らしていました。私たちフランスカンは、



ニャンブラに100ユーロ（10,000 ケニヤ・シリング）の経済援助を与えることができました。それは、小さな家を借りて、炭を売るというささやかな商売を始めるのに充分なお金でした。ニャンブラや他の多くの貧困者たちに供与されたこれらの資金は、ドイツのミッションセントラルと他の篤志家によって提供されたものです。

ケニヤ近郊の貧しい人々の苦境は、アフリカの政界・財界のエリートたち、外国生まれの経済関係者たち、および多国籍企業の手によって幾重にも繰り返し搾取された一例に



過ぎません。彼らは、土地を没収して地代を得、この亜大陸の豊かな天然資源から収益を得ているのです。たとえば、ナイジェリアや赤道ギニア共和国の石油、コンゴ民主共和国のコルタン（タンタルの鉱石）とダイヤモンド、リベリアとカメルーンの木材、ジンバブエの肥沃な農地など。これらは、裕福で政治的にも力を持つ人々——アフリカのエリート、多国籍企業、個人投資家、外向政府——の財源をさらに富ませるサハラ以南のアフリカの広大な富のほんの一例に過ぎません。彼らはこれらの天然資源を開発して、違法かつ不正に生み出された収入の正当な分け前をアフリカの人々から奪い取っているのです。

アフリカの人々の40パーセント以上が、1日1ユーロ（1.25米ドル）以下で苦しい生活をしています。1961年から1999年にかけてのナイジェリアの石油生産高はおよそ四千億ドルに達しています。今日では、人口の92パーセント以上が1日2米ドル以下で、70パーセント以上が1日1米ドル以下で暮らしています（ウィキペディアの「貧困」参照。<http://en.wikipedia.org/wiki/Poverty>）。スーダンでは、石油の生産高は1日あたり40万バレル以上に増大しています。この国の北部にある都市部の貧しい人々や他の地域の人々の悲惨さは、油田の開発と石油の販売が始まって以来、少しも改善されていません。これらのどのケースを見ても、アフリカの天然資源の開発は、深刻な人権侵害と、罪のない一般市民への残虐行為や大虐殺にまで、そして、何百万もの人々の肉体の切断と殺傷にまでつながっています。ほんの数例を挙げれば、コンゴ東部のダイヤモンドとコルタンの開発、シエラレオネやリベリアでの「血のダイヤモンド」の遺産と木材の売り込み、スーダンのユニティ州とそれ以外の土地の収用、ニジェール川デルタ地帯と赤道ギニア共和国において石油の目的の下に行われたリンチ殺人や残虐行為を見れば充分でしょう。資源の不法な採取、すなわち、アフリカの資源の略奪は、暴力紛争、武器密売、人権侵害、人道主義の危機、大部分の人々の強制退去、HIVやその他の生命にかかわる病気の増大、自然環境の破壊、国家機関の崩壊と密接につながっています（Michael Renner, 2002, *The Anatomy of Resource Wars*, Washington, DC, Worldwatch Institute 参照。）このような状況下では、強者の論理がまかり通る略奪

的狀態が生まれてしまうのです。

➤ うした環境で操業する多国籍企業は、法や規制強化が  
└─ ないのを良いことに、ますます無法状態をつくるのに  
貢献し、その結果、人々の苦しみと環境悪化が深まっています。そう  
なると、生態系にとっては悪夢が実現してしまいます。石油が流出  
して、油井から溢れたガスが燃えることにより、土地も河川も空気も  
汚染されたニジェール川デルタ地帯がそのよい例です。鉱物（銅、金、  
コルタン）を洗浄するために使われる水銀や他の汚染物質の残滓は、  
その土地の帯水層や水路に入り込んで、水質を汚染し、動物や生存  
のためにこれらの資源に頼る人間に害を与えます。この状況はまた、  
土地の劣化と、地元のアフリカの農民の農業生産高の減少にも一役  
買っているのです。アフリカは2025年にはその総人口の25パー  
セント分の食糧しか生産できないだろうと予想されています（*United Nations University, Institute for Natural Resources in Africa Report, 2006 - Poverty, Wikipedia, <http://en.wikipedia.org/wiki/Poverty>*）。悪循環が生まれ、それが続いて、アフリカの人々は、暴力と搾取と土地の収用と極度の貧困という罠から抜け出る力をさらに失って行きます。

グローバル化のある側面が、アフリカの極度の貧困状態を一層悪化させたのです。政府の助成金を受け、大量に生産されたアジアの米は、アフリカでは現地で作られた米よりも安く手に入れることができます。遺伝子組み換えされ



た種子が、アフリカの農業システムに取り入れられたことにより、多国籍企業に過度に依存することになります。これらの新品種は、土壌の質と生産性を劣化させるような農薬と肥料を必要とします。これらの多国籍企業は、地元の種子や苗の品種形態を特許化しようとするようになり、生物の多様性を脅かすと同時に、アフリカの農民や国々が自分たちの種子と食糧生産を支配する権利を侵害しているのです。

ブレトン・ウッズ機関（世界銀行と国際通貨基金）は、アフリカの政治・経済情勢に詳しい多くの専門家によれば、貧困を減らし、経済産出量を増やし、国づくりを促進するのを助ける目的で創設されましたが、アフリカの人々にとっては益ではなく害をもたらしたのです。1980年代と1990年代の構造調整プログラム（SAP）は、アフリカの国々が直面する多くの課題への応戦を強化しようとして失敗したこれらの国際機関の試みのほんの一例です。アフリカにおける極度の貧困の割合は、SAPやブレトン・ウッズ機関の他の試みの下で実際には増加しました（1981年－2001年、極度の貧困の割合は41パーセントから46パーセントにまで増加し、2001年には3億1千8百万人が貧困の中で暮らしています。

*Poverty, Wikipedia,*  
<http://en.wikipedia>.



org/wiki/Poverty 参照。)これらの機関は、アフリカで極度に貧しい人々を増加させる原因となったばかりでなく、積極的に一役買ったのです。アフリカの国々は、2015年までに国連のミレニアム開発目標を達成できないだろうと深刻に懸念する向きもあります。開発目標とは、貧困率を50パーセント削減し、すべての人が教育を受ける機会を増やし、幼児の死亡率を減らし、母子の健康を改善し、HIVやその他の病気と闘い、環境の持続可能性を確保し、発展のために地球規模のパートナーシップをつくり出すことです。

アフリカの資源は、適切な監視と法の支配、そして国際社会からの適切なサポートの下に正しく管理されたならば、地域と国家の経済の大きな発展に寄与したことでしょう。しかし今、アフリカの天然資源は、アフリカの人々とその自然環境にとって、呪いであると同時に謎なのです。

### 3. アマゾンと環境正義に関する考察

ロドリゴ・デ・カストロ・アメデ・ペレ、OFM

ダヴィ・コペナワ・ヤノマミは55歳です。彼は、地球上で最も古い民族の一つであるヤノマミ族という狩猟農耕民族に属しています。ヤノマミ族はブラジルとベネズエラの国境にまたがるアマゾンに住んでいます。ダヴィは、ヤノマミ族の土地所有権を保証するキャンペーンで国際的な評判を得ました。最近の公開書簡で、彼はこう述べています:「あなた方は、私たちのことを貧しいと、そして、私たちの生活

は良くなると言っている。しかし、私たちの生活が良くなる  
と言えるほど、あなた方は私たちの生活のことを知っている  
のか。私たちがあなた方と違って、違った暮らし方をし  
ているから、あなた方と違った考え方をしているからと言っ  
て、私たちが貧しいということにはならない。私たちヤノマ  
ミ族は、祖先から受け継いだ富、あなた方白人が見ることの  
できない豊かさを持っている。それは、私たちを生かしてく  
れる土地、清い飲み水、幸せな子供たちである。」（2008  
年2月25日付 ヤノミ族の開発に関する公開書簡）

アマゾンに関する環境正義の問題は、この地域の社会的・文化的・環境的問題の中心において、天然資源の  
所有権が如何に不平等なものであるかを如実に示しています。  
ここ数十年間、この所有権は、市場が現在の環境危機を解決  
できるとする経済論理と連動していました。上に述べたダヴィ  
イの言葉を引用すれば、私たちは考え方を考えるように求め  
られているのです。つまり、私たちがしばしば「後退」と考  
えていることは、何か新しいことを打ち立てるチャンスと見  
たほうがよいということです。持続可能性を生物学的多様性  
の結果と考えるだけでなく、民族および社会文化的多様性の  
結果でもあると考えるようにダヴィイは促しています。彼は私  
たちに、アマゾン地域を経済的合理性や人口統計学的指標や  
市場のカテゴリーを越えた視点で考えるように勧めています。  
なぜなら、これらのカテゴリーは必ずしも、地域の多様性の  
すべてを示しているわけではないし、この土地で人々がこれ  
までどのように生きてきたかを示しているわけでもないから

です。



アマゾン是一个の広大な地域です。それは、ブラジル、ボリビア、コロンビア、エクアドル、ギアナ、ペルー、スリナム、仏領ギアナ、そして

ベネズエラをそれぞれ少しずつ含んでおり、世界最大の流域を構成しています。この地域には三千万人の人々が住んでいます。そのうちの約三分の一が農村で暮らし、その中にはさまざまな土着の人々も含まれます。アマゾンの森林は、ものすごい生物学的多様性に恵まれていて、地球の生物種の四分の一から二分の一までが集まっています。参考までに言えば、アマゾン中部の1ヘクタールの土地に、全ヨーロッパより多くの植物種が存在するのです。アマゾンにはまた、利用可能な世界の真水の大部分が集中しています。

地球規模で考えれば、アマゾンを一種の「エアコン」と見ることもできます。それは、ブラジル中南部と地球の他の地域に湿気をもたらすからです。アマゾンには豊かな鉱物資源があります。たとえば、鉄、アルミニウム、ニッケル、ダイヤモンド、金、ウラン、そして、現在は天然ガスと石油を

生産しています。アマゾンには豊かな地域ですが、貧しい人々を抱え、都市部には貧困層が密集しています。

アマゾンは、西欧の発達様式の大いなる矛盾を抱えています。天然資源の所有権が一か所に集中し、それが、この地域の社会的・環境的・文化的諸問題の原因となっています。鉱物や森林の所有権とひどくなる乱開発は、土地紛争を生み、それが、農村の人々の排斥につながっています。そのために、人々は河川や森林に近づくことができず、都市部への移住を余儀なくされ、その結果、経済、社会、文化の貧困化が増大して、生物の多様性が破壊され、大気中への二酸化炭素の排出量が増えているのです。採掘や試掘もまた、紛争の種となっています。

大規模な単一文化、畜産業、木材切り出し業は、土地の所有権を一部の人に集中させ、天然資源をめぐる争いを誘発します。そればかりでなく、資源の持続不可能な乱開発と土地の奪取、強制労働、森林破壊をもたらす状況をつくり出します。ダムや港や道路の建設は出稼ぎ労働者には魅力的で、陸上交通を活性化させますが、土地を伝統的な形で活用したいと願う人々を追い出す原因となります。



この地域の中心課題の一つは、森林破壊です。ブラジルでは、アマゾンの原生林の18パーセントが伐採されています。森林破壊は次のようなプロセスを経て起こります。つまり、公開された未開発の土地では、そこの居住者が土地を分割して自分の所有権を証明しようとしします。最初のサイクルでは、彼らは最も利益のあがる木材の切り出しに誘われます。その際彼らは何の頓着もせず丸太を切り出します。樹木の伐採と搬出に当たっては、数え切れないほどの若木やあまり利益とならない樹木が破壊されます。トラクターが森林を突き抜けて走り、空き地をつくって行きます。木材は木材業者に最低価格で売られますが、この収入は小規模な土地所有者にとっては必須のものです。二番目のサイクルでは、森林の段階的な破壊が続けられ、あまり価値のない木材が引き抜かれます。そして、再び若木が破壊されるのです。三番目のサイクルで、土地の所有者は残った樹木を焼き払いますが、それによって広がる火は、時には広大な範囲に及びます。火事がおさまると、牧草の種が蒔かれます。最初の数年間は、高い生産性を示し、収益も上がります。しかし、時が経つにつれ、土壌は涸れ、生産性は落ちてゆきます。そうすると、新たな場所へと移動し、同じサイクルが繰り返されます。この事例の論理によれば、荒廃した土地を回復させるよりも、新しい土地を開墾する方が利益が上がるのです。

森林破壊のほかにも、大きな問題があります。それは特に、土地の占有のプロセスと支配権に絡む紛争、開発の仕方、軍事化、麻薬取引、国際化です。これらの問題は、アマゾンで

は二つの大問題につながっています。一つは、土地問題、もう一つは、社会的・生物学的多様性に対する権利の問題です。

多様性は生物学的にも社会学的にも、アマゾンの特徴です。この地域の豊かな生物学的多様性については、すでに述べて来ました。しかし、それだけでなく、地域の住民も多様で、農民、伝統的および土着の民族で構成されています。しかし、資本主義の投資家たちは、そうした人々を障害物と考えています。なぜなら彼らの暴利を貪る開発拡張を妨げるからです。生物学的多様性に関する国連条約によれば、この条約に加盟する国は、地元住民の文化と習慣に従い、生物学的資源を守り、活用する義務があるとされています。そのような立場から見れば、それぞれの文化は、その生態系と物質的かつ精神的な関わりを築き、生存を可能にする知恵を生み出すものなのです。



チコ・メンデスは、アマゾン地域で起こった暴力事件の一例です。彼は1988年に殺されました。彼は9歳の時からゴムの木の樹液採取労働者として働いていました。彼は環境保護のために闘いましたが、それは、自律的な経済

活動を中心とした地域の創出と、伝統的な民族による自然保護を訴えるためでした。ブラジルでの彼の闘いは、いわゆる特別保護地の創出につながりました。これらの保護地は、地元の人々の生活を改善したいとの思いと発展と環境保護に対する願いとが重ね合わさったものです。

**環**境正義の問題を見た場合、環境危機や破壊に最も曝されている人たちというのは、収入の低いグループの人たちです。経済的・社会的不平等は、天然資源を手に入れる能力が一握りの人たちに集中していることと相まって、この不正の根底にあります。チョコ・メンデスとゴムの木の樹液採取労働者たちの闘いは、社会的・生物学的多様性の維持が地元の人々のネットワークを強めることにかかっているということを示しています。地元の人々は、「集団的な主体」となって、人々や文化や自然保護を中心とした発展を目指して政治的な闘いを続けて行かなくてはなりません。それゆえに、社会的・生物学的多様性を守るための闘いは、環境正義の一部なのです。環境正義は、生活の質と共通善に不可欠の、生態系的にバランスのとれた環境の促進と、社会正義のために働く他の組織との協力との上に築き上げられるものです。そのような協力は、社会的疎外や環境危機といった地球規模の資本主義の影響に対する抵抗力を作り、それに代わるものを生み出すことができます。

カトリック教会は、16世紀からアマゾンに存在しています。今日では、教会はアマゾンの人々の生活と正義と平和を守る



立場を貫いています。この地域での司牧活動と宣教活動に携わる信徒、修道者、司祭、司教はたくさんいます。彼らは、地元の人々と共に働き、環境問題に関心を寄せています。さまざまな人たちが環境正義のために働いていることで、殺害の脅迫を受けました。たとえば、アーウィン・クラウツラー司教、アントニオ・ポッサマイ司教、ジェラルド・ヴェルデイエ司教たちです。シスター・ドロシー・スタングは、そんな最近の犠牲者の一人で、2005年2月12日に、土地改革と環境正義のために働いていて殺されました。彼女は、環境正義のために働く福音的闘争の一例です。

中 南米の司教たちは2007年5月にブラジルのアパレシダに集まり、第五回中南米司教会議（V CELAM）を開きました。その総括文書では、環境問題について述べられています。第二章では、**生物学的多様性、エコロジー、アマゾン、および南極の現実**が扱われ（#83-87 参照）、第九章では、私たちの共通の故郷である環境への配慮を促しています



（#470-473 参照）。#474 では、司教たちは、一連の提案と指針を発表しています。それらには、被造物への配慮、現代の開発によって脅かされている弱小民族の特別な保護、新しい開発形態の探求、自然

を守り、回復する社会政策の擁護などを促進するような福音化が含まれます。

この精神で、また、アマゾンの人々と環境に対する誠実な心で、フランシスカンは、アマゾンにおける存在とミッションを強化し、再活性化するために、互いに対話を進めています。アマゾンにおけるフランシスカンの存在は過去数世紀に遡ります。

#### 4. ニューオーリンズ：私たちはこの地上に永久の都を持っていません

リタ・M・ヒッキー、O.S.C.

**聖**パウロはヘブライ書の中で「私たちはこの地上に永久の都を持っていません」と警告しています。米国ルイジアナ州のニューオーリンズや湾岸沿いに住む人で、この言葉が真実であることを疑う人はいません。私たちはそれが文字通り真実であることを体験したのです。もちろん、パウロが信徒たちに警告していたのは、人生には永遠の目標があるということでした。しかし、その目標の達成は、時間と物質世界という制約の中で人間に課せられたものです。これらの資源をどう節約するかで、目標を達成しようと努める人間も含めて、すべての被造物の宿命が決定的な影響を受けるのです。

アメリカ先住民は偉大なミシシッピ川を尊敬を込めて「豊富

な水の父」と呼んでいましたが、この川が最初のヨーロッパ人の目にしたルイジアナ沿岸を形成するのに6000年かかったと科学者たちは推定しています。人間の無知と傲慢が僅か100年足らずの間にこの一帯を破滅の瀬戸際まで追いやったのです。

過去75年間にわたって、地域の人々に発展と富と繁栄を約束する「進展」と考えられていたさまざまな決定がなされました。これらの約束の一部は、善意でなされたとしても、地域の大半の人々にとっては、守られなかったし、大きな代償を払うことになったのです。

約束は確かに富をもたらしましたが、それは一握りの人々にだけでした。それは、有害な奴隷制度をルーツとする態度に支えられた安価な労働力の維持を助長しました。発展を促進はしましたが、それは、動植物の豊富な湿地帯の消耗を引き当てにしたもので、運河や水路の建設は醜さと汚染と破壊につながる高速道路となったのです。

1878年のニューオーリンズの市街地の測量地図によれば、20万人の市街地居住者は、ミシシッピ川のカーブ近くの細長い土地に集中していました。この比較的高台の土地は、何世紀もの自然の定期的な洪水によってできる河川堆積物がもたらした自然の堤防の上にありました。

／＼ リケーン・カトリーナは、２００５年８月２９日の早朝にメキシコ湾岸を襲いました。その後が続いたのは苦悩と破壊で、それは世界中の人々に衝撃を与えました。世界でも最も豊かな先進工業国で、なぜこのような大惨事が起きたのでしょうか。答えは、この国の決定、価値観、態度にあります。自然の生態系バランス、つまり、土地、水、空気、植物、動物、人々が、いわゆる進歩と経済発展のために犠牲にされたということです。

１８７８年の地図をカトリーナに襲われた後の水没した街の空中写真と比較してみると、１８７８年の居住区が、２００５年の洪水前の「川沿いの



細長い部分」とほぼピッタリ一致することがわかります。破壊的な洪水のほとんどすべては、干拓地のために無防備になった地域および人工の堤防が決壊した人工運河と人工水路の近辺に集中しています。

ミシシッピ・デルタの湿地帯は、襲来する暴風雨に対して天然の緩衝材となっています。この湿地帯には常時、小規模の漁師や猟師の共同体がありましたが、彼らは常に環境と調和

して生きて来ました。2005年の暴風雨の前でさえ、彼らは自分たちの共同体と生計手段が、湿地帯に押し寄せた商業化と工業化のうねりのために消滅して行くのを目撃していました。

## ロス・イレニョス

**ロ**ス・イレニョスは、18世紀末にカナリア諸島からルイジアナ州のセント・ベルナルドに移住してきた人たちです。彼らは、成功した農場経営者、牧畜業者となり、湿地帯と沿岸水域で働いていました。小規模で結束の強い、エコロジーの面でもバランスのとれた共同体で暮らしていた彼らは、ニューオーリンズの市場に、豊かな農作物、畜産物、

海産物、毛皮などを提供していました。こうした活動のすべては、健全な湿地帯と沿岸の環境を維持することで初めて可能となるものでした。イレニョスたちは、この現実を良く知り、尊重していました。しかし、



第二次世界大戦の後、ニューオーリンズ港は急速に発展し、船会社、受益業者、政府が、川上の内港への近道をつくろう

と言い出したのです。1956年に、環境保護活動家やセント・ベルナルドの人々の反対を押し切って、ミシシッピ川湾岸水路（Mississippi River Gulf Outlet：頭文字をとって、Mr. Go と呼ばれるようになった）の建設が許可されました。地元の人々は最初から、この水路のことを「ハリケーン・ハイウェイ」と呼んでいました。

➤ の「Mr. Go」は、川上への距離を 37 マイル（60km）  
└─ 縮めただけで、作った人たちが目論んでいたほどには交通量は増えなかったのです。1965年の9月にハリケーン・ベッツィーが襲った時には、水路はまだ正式には開通していませんでしたが、セント・ベルナルドの人々は自分たちの恐れが現実となったと感じました。しかし、ベッツィーは2005年の8月に襲ったハリケーンとは比べ物になりませんでした。

1989年までには、沿岸部の湿地帯の浸食が進み、Mr. Go の幅は最初の650フィート（195m）から1500フィート（450m）近くにまで広がっていました。この水路は、一日に貨物船一隻しか通れず、収益をあげるところか、船一隻につき平均1万2千ドルもの損失を州に与えています。

イ レニョスたちは、視察者たちをメキシコ湾の1マイル（1.6Km）中ほどまで案内し、かつてはそこに自分たちの家やコミュニティ、仕事場があったことを示しました。科学者や技術者、環境保護家たちは、次に大きなハリケーン

が襲って来た時には、高潮が Mr. Go にまで押し寄せ、その威力は20%～40%も増大するだろうと警告しました。カトリーナが襲う前の金曜日に、ウォルター・ボアツソ上院議員は、上院委員会公聴会でこう警告しています：ミシシッピ川湾岸水路を維持することは、「住民の命でロシアン・ルーレットをするに等しい」と。

カトリーナはセント・ベルナルドを地球上から消し去るところでした。当時この地域の人口はおよそ6万7千人でしたが、民族的にも人種的にもさらに多様化していました。そんな中で、イレニョスのコミュニティはその中心にありました。押し寄せた27フィート（8m強）もの高潮で、一体どれくらいの人々が亡くなったのか正確には誰も知りませんが、2007年の人口はおよそ3万3千人でした。

## 第九区

ニューオーリンズの主な産業である観光事業は、大量の低賃金の労働力を必要とします。それが可能なのは、パートタイム労働者を社会保障なしで予備要員として確保しているからです。第九区の多くの住民は、こうした低賃金のパートタイムの仕事をしていました。他の人々は個人の家で働き、帳簿外という形で支払われることが往々にしてありました。社会保障の整った医療関係で仕事を得ている人がいる一方で、これらの仕事を特徴づけていることが一つあります。

これらの仕事は、ハリケーンや暴風雨に備えて働く労働者を必要とします。仕事場に来なかったり、危険な仕事に留まることを拒否したりする人たちは解雇されます。また、収入の低い人たちの多くは、避難するゆとりさえないことも事実です。

従来は、市と州は、人々が暴風雨の過ぎ去るのを待つ避難所を提供してきました。しかし、2005年の時は、避難命令を人々に真剣に受け取らせるために、そのような措置は取られなかったのです。最後の危機が迫って来た時に初めて、人々はスーパードームやコンベンション・センターに避難したのですが、そこでは、それほど大人数の人々を受け入れるだけの備えはできていませんでした。

第九区の洪水は主に、きちんと係留されていなかったはしけ船が暴風雨の間にほどけて、運河沿いの土手にぶつかり、堤防が決壊したことによるものです。暴風雨が去っても、戻るところはどこにもありませんでした。人々は、終わりの見えない避難生活を送っていました。多くの人々がいまだに帰ることができずにいます。

**ロ**ス・イレニョスと第九区の人々は、カトリーナによって人生を一変させられた人々のほんの一例に過ぎません。しかし、彼らは自然災害だけの犠牲者だったわけではありません。ロス・イレニョスは、沿岸の湿地帯のエコロ



ジーが尊重されなかったために、ひどい経済被害に苦しみましたし、第九区の人々は、はしけ船のために帰る家を失い、親戚や隣人が経済的搾取のために死んでゆくのを目にしました。

ニューオーリンズとメキシコ湾岸を復興させようと多大な努力がなされており、それ自体は良いことです。けれども、その地域の生態系のバランスを立て直したり、過去の社会的不公正を正したりするための努力は充分になされていません。私たちの街は、神から与えられた環境のバランスと神のすべての民の尊厳を守り、育むことの大切さを教訓として学ばなければなりません。



## 結論

これまで述べた環境問題についての四つの「体験談」は、世界各地のフランシスカンがそれぞれの地域で如何にして「時のしるしを読む」時間を取っているかを示す事例です。彼らはみな、地域に住む人々の人権と尊厳に対して深い思いやりを示し、それと同時に、母なる大地とそれがもたらす恵みに対して非常にフランシスカン的な愛を示しています。これらの体験談は、私たち全員に対する一つの呼びかけなのです。私たちもまた、自分の置かれた場所で、自分を取り巻く世界の現実を時間をかけて調査し、そこに生きる人々と彼らが抱える問題を知り、地球の苦しみとその苦しみがどのように人間の苦しみと関わっているかを感じ取ることが求められています。環境正義に関わる諸問題の具体例としては、エネルギー問題、鉱業、水に関する社会的・環境的諸問題、ゴミ問題、天然資源をめぐる紛争、有毒廃棄物、地雷、遺伝子組み換え(GMO)などが含まれます。これらの諸問題を発見したら、そうした状況を正そうと努力している個人や組織を見つけ、彼らと力を合わせてよりよい世界をつくらなくてはなりません。

手始めに、自分の修道院や使徒職の中で、次のような問題について話し合ってはどうか：

- 自分の地域では、どのようなことが主な環境問題になっているか？そこから利益を得ているのはどのような人たちか？

- これらの問題は、地域の人々の生活にどのような影響を与えているか？
- どのような団体が、これらの問題に取り組んでいるか？
- 自分の地域では、環境正義の諸問題の取り組みにどのように関わるべきか？



## フランシスカンと環境正義

環境の危機と社会正義に直面して

東京都港区六本木 4-2-39

フランシスコ会本部

2011年8月15日